菩薩

北本哲三

広場は芝生の緑の絨毯。
石段の上、見上げる平和塔には
ゆつたりと静座する金色の聖観音像。

熱いですな。

全くやり切れんですな。

やたらに扇子が動いている。

そよとの風もない。

草も木もみんな萎えてるみたい。

氣象台の発表では

八十五年ぶりの暑い夏。

平和祈願祭。

あの日もこんなでなかったか。

私の心に鉛のような重さで

戦争の思い出が甦える。

もう三十年になるか。

昭和五十年八月十五日。

きょうも晴れ。
かんかん照りだ。
太平山は浅黄色にかすみ、
振り向けば 砂防林の彼方
はるかに横たわる港のある海。
ビルや家々のたたずまいの中
見えかくれする舗道に
キラキラ光って
かぶと虫みたいな車の列。

秋田市平和公園。

市内を見下せる高台の丘。

きょう、列島はお祭りの氾濫だ。

戦争を憎み、平和を希う

花のようなことばで包まれる。

美しい衣装をまとったそのことばたち。

その中味について、私は思う。

頭上から直下してくる

めくるめくような陽の光。

全身からふき出し流れ落ちる汗。

——お祭りのムードに酔いしれるな

——せつな的な

花火のようなことばに酔いしれるな

——おのれのところを嘔みしめよ

マイクにのって

司会者の声が流れる

——メッセージをいただきます。

秋田市議会議長どの

夏の花

野口清子

私は迷う。

いったい何を云えばいいのか。

見上げる塔の観音像、

金色に輝やき

目を半眼に、ほぼえんでいる顔。

菩薩とよばれるやつ

その美しい顔。

今年の夏 私は花を育てなかった

赤い蝶のように

スイトピーが落ちたあとに

枯れた茎が いつまでも

つるされ

チューリップと矢車草の咲いたあとに
ねこじやらしと かやつり草が背くらべし
雑草のなかで カンナが
やせて 小さい花を咲かせた

あれも これも いそがしすぎたから
くらしがきびしすぎたから
花よりも美しいものに魅せられたから
花よりも不確な世界をさまよっていたから

私は外の世界への問いかけと
自分への問いかけでいっぱいだった
蜂の巣のように 言葉の矢はつきささり
この難儀な世の中に
今生れたばかりのように
手さぐりし 確めようとする
戻ってこない 答えを求めて

真夏の残酷な太陽にやかれ

水やりを忘れた鷺草は干あがり
シンビジュームの鉢もやせた
毎朝 幾十もの花傘にいろどられた
朝顔の竹垣もない

こんな庭の荒廢を眺めていたら
敗戦の年の夏を思いだした
野草も いもづるも
食べられるものは みんな食べた

飢えていたので
大人も子供も すぐ坐りこみ
カボチャの花ばかり 肥えて大きな花をつけ
エネルギッシュな 黄金色で
朝をかざった

その花も
天ぶらにするとおいしいと もがれ
ザリザリと焼かれ

植物も人間も 水氣を失って行く

一九七五・七・二八

ベカ

河合俊郎

わたしの祖父は杉の板を組みあわせて
ベカという小さい舟を作った
そいつに乗って沖へ出て ヒラメやコチをひっか
けてきてくれた

トンガの少年たちは大きな丸太をかかえてきて海
に投げこみ
そいつに抱きついて手足をばたつかせ
沖へ出る

トンガの祖父たちは丸太をくりぬいてカヌーを作
った
その昔
ひとびとは葦を編んで小さい舟を作った
いちばん軽くいちばん浮力のある舟を求めて

昨日のように歴史は大洋にいどみ
より大きいより速い鉄船を求めた

いま
わたしは祖父の残した廃舟ベカに腰かけ
果しれぬ水平線のみつめる
やがて
ひとつの小さい黒点があらわれる
こちらに向ってくる。

タンカーの内部でも
わたしの内面でもうっとうしい歴史が離れ
原木へもどろうとする

私のリアリズム(8)

——自伝風に——

松永浩介

「詩精神」雑誌（創刊一九三四・二一
終刊三五・二二、全二一冊、前奏社発行）
プロレタリア詩人会からナルプに参加した
詩人たちは、そこで十分に作品を発表する
機会を得ず、発表機関の狭小に悩んだ。殊
に弾圧の嵐によって、一九三三の後半以後、

ナルプの活動は麻痺状態となり、逆に翌三
四年三月にナルプは解散の余儀ない状態に
導かれた。本誌はこのような時期に、壊滅
に瀕したプロレタリア詩の伝統をまもるた
めと、久しく発表機関の狭小になやんだ詩
人たちの新しい舞台を作るために新井徹・
遠地輝武が計画し、前奏社を起して新井が
経営にあたった。遠地輝武、小熊秀雄、大
江満雄、後藤郁子、郡山弘史、田木繁、横
本楠郎らを主要執筆メンバーとし、千家元
鷹、北川冬彦、神保光太郎、植村諦らの協
力を得て出発したが、のち同人制をとり内
田博、大元清二郎、織本唯夫（佐々木伊織）
榎南謙一、島田宗治、鈴木泰治、船方一、
松永浩介、森谷茂、木村好子、渡辺順三ら
が加わった。毎号七三—一〇六頁。発禁一回
（第一〇号）本誌はたまたま当時のジャーナ
リズムをとらえた「不安の文学」の興隆期
を背景として、鬱然たる進歩的陣営を形成
し、詩の仕事における多くの問題や作品を
花咲かせて「詩精神」時代を形成した。

ととその幼稚なのに自分ながらあきれている。
（戦前プロレタリア詩人の弱点は、その作品
への態度の観念主義と、表現上の細叙主義で
ある。特に、その表現に於ける平板な細叙主
義の傾向は、いわゆる労働者詩人の創作傾向
をとらえてとりわけ著しかった。松永もその
一人である。）と遠地輝武が「現代詩の体験」
（酒井書店）で書いているが、そんな作品を使
箋に鉛筆で走り書きして「批評して下さい」
と書き添え、留守宅の郵便箱に投げ込まれた
亀井勝一郎が、当惑して新井徹を紹介して
くれた気持が今になってよくわかるのである。
敗退の時代を、自己に還れというインテリゲ
ンチヤの発言に影響されながら、暗い現実を
打開するには工場に這入ってそこから組織を
建て直す以外に道はないというのが労働者詩
人の置かれた立場であり、共通した考えであ
った。文学と政治との関係を素朴に、直結的
な形でしか理解出来なかつた私を、そこから
脱け出すメドを掴ませてくれたのは「詩精神」
であった。田木繁が「鉄打工・外一篇」を発
表（一九三四・八月号）したのを大元清二郎
が「嘘のリアリズム」だといって批判し、そ
れと併せて作品「鉄骨工場」を発表したの
が論議を呼んだ。大元が田木の「鉄打工」を

嘘だと指摘したところこそ田木が「自己否定」
の精神を狙った詩的現実であつたのだと思う。
いわば田木は自己否定を打ち出すために生産
場面を逆手として用いたのである。そこのと
ころが大元にはよくわからなかつたのである。
「現実と詩的現実の關係」と題して「コスモス
通巻四四号」で西杉夫がくわしく批判してい
るので此処ではその作品の引用はやめておく
が、私は田木の「鉄打工」成立のモチーフに
ついては西は少し深読みしているように思え
てやはり遠地説をとりたい。大元は競作とし
て出した「鉄骨工場」の終りの方で書いて
いる。

光明丹の赤い色が眼の底でじりじり焦げ
る。痛い。灼けついてくる太陽。ふいても
ふいても流れしづく汗。汗。
鉄打をやっている男達に、汗を拭く時間
を與えてやりたい。

氷水の一杯も飲ましてやりたい。

自ら集団となつて慾するものを要求する
がいい。怒れる如く歯を噛みしめて、空気が
槌をささえて打つ男達。

今日も鉄骨工場の日は
暮れようとしているぞ。

汗をふく時間を与えてやりたい、氷水の一
杯を飲ましてやりたい、等は作者の（第三者
の）センチメントで、自ら集団となつて欲す
るものを要求するがいい、等は高見からの御
説教である。これがあるために「鉄骨工場」
は感銘をうすくしているのである。いわばプ
ロレタリア詩の欠点である観念性の尾を残し
ている。「嘘のリアリズム」に対して田木は
「詩精神」の十月号に「私の創作プランに寄せ
て」を発表した。この両者の論争をめぐって
伊藤正奇や津川莊司、森谷茂等々の意見が出
されたのに刺激されて私は「船底修理」を書
いたのである。その時期に私が同じような生
産場面に働いていたからである。

船底修理

いきなり 梯子タラップを降りて行く

腫孔奴カマシ、めんくらつてお先まつくら。

むつと鼻をつきききた空カラ。

ぶらぶらする肩の道具袋。

すべる足もとたしかめ、降りて行く汽罐かま

場

ぐわん、ぐわん、ぐわん

鉄板を叩く音がまともにくる。
——通風筒ベネチエから落ちてくる風
ホイラーを掃除する火夫
コルバンカカ
——まるでうごめいている虫だ。
俺の顔もあんなにどす黒いかな？ 埃と汗
で
——眼がなれて来た。

「ぐずぐずするねえ、日が暮れるぞ！」
道具もおろさぬ先に俺達は煽りつける
だが、奴等はすましたもんだ
「大工ッ！ 急いでは事を仕損じる……」
笑いが何処かでおさえられている
明日の出帆 やり切り仕舞いの仕事だ。

コロコロコロとふいごからほうられる
有難くもねえまっかなりベット、汗の原料。
素早く穴へさしこむが早い
ましかまえたハンマーが交互に打ちおろさ
れる

はずすまいと懸命なボーシ
ん
はじかれまい必死にふんがまるる当盤あてばん
けちりのすきもない四人の呼吸。
ひしがれた生活の怒りか？

ひきしまったその時の仲間の顔
そこにこそ、奴等の真実を見出そう
もりあがった肩にベツトリ吸いつくシャツ
——光明丹がしみついて——

百十度 流れる汗

いきれと疲労でみんなだまりこむ
ひとしきり

鉄板のわめきが船底をこだます

ポー ポー ポー

警笛をならし

おっつけ迎えの蒸気がくる

夕日が泳ぐ波の上

涼風にはだけた胸をなぶらせて

狼談に一日の疲れを笑いとばす

夏の沖仕事の帰りはごらくくだ

仕事の山も見えて、終業間近。

——ぶざまな顔に笑いが浮ぶ

「さあ、もうひと息がんばろうぜ」

互いに示しあわせて

さて……

次の仕事にと移る仲間達。

(註) 終業のことを職人言葉で「へげるとい

「船底修理」は「詩精神」の三五年三月号に
出された。同じ三月号に船方一の「ふるさと
への歌」がトップに出ていた。

ふるさとへの歌 船方 一

おれの故郷は隅田川

そのふるさと、隅田川を

見ぬこと——七年

お前、隅田の流れは、その河岸は

いかに変わったことだろう

石川島造船所の機械の響音が耳をうち

クレーン移動きが臉にうつる稲荷橋の下

そこにつながれた五十噸たらずの石炭船

「山本丸」十三号

それはおれにとつて忘れることのできない

「揺籃」だ

七年——この歳月は、くるしき闘いは

一人の船頭の子に、くらしに屈せぬものを

くらしのこくのある味を

ねつとりとた、きこんでくれた

赤銅色のこのからだに、はらわたに

わらう

黒川 洋

腕のわらいをしずめ

他人の街を腰にはしよって行く

七月の湿めっぽい季節風

騒めくプラタナスの葉すえ

明るすぎるナトリウム灯

踏みだす影におのれを否定する

その想いを思いこむというか

群れることが精いっぱい

しおにかすむほどの未来に浮き足だち

走りつづけた果ての

ケツワリの心臓つかみだし

道化になり下がる

おまえは何を闘った

他人の心を盗ったという

いち行の比喩の軽さに頸をたたかれ

のけぞるばかりの嗤い

労働の幸福について

幻花 いち輪の武器もなく

「みち」は揺れ「きもち」はうきしづみ
仕事の前ではないこのごろ
—めてはむかしの想い出にひたるとき
思ふともなうかんで来るのはふるさとの
こと
お前—隅田川のこと
小蒸汽の警笛 櫓のきしみ 行商船の呼び
声
河岸のともしび 電車のひびき
あかあかとたかれた寒むさをしのぐ石炭の
火
千住大橋から永代橋までの数々の橋 無数
の枝河
しづかに眼をとり、ねころべば
これらむかしのありさまが
腹の底から眼頭へまで、なまあた、かいか
のとなつて流れだしこみあげてくる
ごみや流油 木片やわらむしろ
犬や猫の死骸 ときには人間の死體
さまざまの道具やその破片
水にうかぶありとあらゆるもの、流れ
川のにほひ 川の呼吸
吸ふ息—上げ潮六時間
吐く息—下げ潮六時間

二十四時間二呼吸
その呼吸—その流れによつて
かまや茶碗があらはれ 米がかしがれ
たき木がつくられ お茶がわかされ(註)
仕事着やからだがあらはれて行く
そこにはおれたち船頭のあらあらしい
またものかなしい河から河へのくらしが流
れている
酒とばくち 女郎買と浪花節
ときにはおなじ労働者からさへ
さげすまれ、笑はられる
無智そのもの、ような船頭たちのくらし
だがそのおれたちもいくつかのかちどきを
あげた
あの歴史的な浪のたかまりと共に
いまかつての反抗や憤懣は夢のごとく
もくもくと櫓を押し棹をさしてゐる船頭た
ち
なりをひそめて流れる隅田川
だがおれは信じる、信じたい
お前の水面に旗ひるがへる日のくることを
お前の流れに歌声なりひびく日のくること
を

ゲートをくぐるたび
おまえ自身の不幸を重ね
今日を裏切り
明日をも裏切り
休日のいち日を風に吹かれて
鳩の屍を見たというだけのことだ
川よ 隅田川よ ふるさとよ なかまらよ
その日のためにそのために
おもひをかため、ほりさげて
「いばらの道」ふみしめぬこう
今日のくらすの中に生きぬこう
(註) 水上生活者は河からたき木を拾って使ひ買
ふことはほとんどない。また大正六年頃ま
では隅田川の吾妻橋より上流へ行くと川の
水がめたものである
(附記) 船頭は隅田川を大川とよんで隅田川とよ
ばないがこゝでは隅田川としておく
(一九三五年詩集前奏社から)

れをあたりまえのことだと思っていたが、誰に教えられたのか忘れたが「詩行動」で岡本潤が「船底修理」をほめていたときかされた。私はアナキスト派の文学雑誌は読んでいないのでそういう詩誌のあることも知らなかったが、岡本潤の名は知っていた。「詩精神」が同人制をとったのは「船底修理」がのつた三月号からであったように思う。そんな用件を兼ねて上京したのだと思うが、「詩精神」発行所の新井徹を訪ね、その時にその「詩行動」をみせてもらった。「詩行動」は一九三五年三月創刊・（同年十月終刊）岡本潤、小野十三郎、植村謙、伊藤和、局清（秋山清）、長谷川七郎、丹沢明（青柳優、齊藤峻、池田克己、福永剛、赤石鋳、御手洗凡八現代詩の胎動期・菊地康雄の年表より）とある。

その第一巻第二号で（昭和十年四月発行・東京市滝野川区田端新町一ノ三九 発行人清水清）三月の詩評として岡本潤が次のように書いている。

ふるさとへの歌（船方一）はプロレタリア抒情詩として「韻律」のある詩だ。かういふ詩はどうかすると詠嘆調に流れやすいものだが、作者の強度の意欲がそれを救っている。この「韻律」がプロレタリアの

のであるかどうかは問題だが、韻律、韻律とやかましく云はれてゐる今日此頃、この詩は相当問題にされるべき詩だと思ふ。船頭の「生活」が概念的でなく歌はれて、口ずさむにいい、調子が出てゐる。

船底修理（松永浩介）小主観を抑へて「生活」を前面に押し出しながら、その中に社会的感情（リズム）を波打たせてゐる詩として、此の詩は可成高く評価されていいものだと思ふ。ここでも矢張り言葉の切りつめがもつとなされるべきだと思ふが、全体的に見て適確なものをとらへてゐる。此の詩として残されてゐるものは「生活」に対する批判である。その批判が観念的でなく、強い制調機として詩の中へもりこまれた場合、もう一段と引締つた強い詩が書かれるだらう。現存するリズムを殺して、もう一步深いところからのリズムをもちり上げること、「社会的現実」のギリギリの叫びがそこから湧き上つてくるだらう。此の詩に就いて見ても、プロレタリア詩の進展の道は、現実を掘り下げるることによって「詩」を一段と高度なものにするところにあるといふことが考へられる。（三月の詩評からの抜萃）

この批評に対して第三次コスモス十号の（一九六五・十一月）松永浩介——同人素描——で秋山清が書いている。——この岡本の批評は適切であり、松永の活動はその後、戦争の下をくぐつて戦後につづき、生活に対する強い批判」が彼の詩を育ててきた。遠地輝武と新井徹が編集し、小熊や田木が書き、そこに船方、松永が加わつた時期の「詩精神」（プロ文学が退潮を余儀なくしていた時期）には見るべきものがあつた。中でも抒情のうたの船方と生活的リアリズムを押し松永と対象的で、現在にまで詩人の生き方、詩人のタイプ、詩のスタイルに示唆するものがある。対立して

いた思想的立場の彼らの上に私の記憶は残り、岡本がその頃評判だつた船方の「ふるさとへの歌」よりも松永の「船底修理」をより評価したことは、そこにアナキストたちのその時期の主張があり、また現実に向ける松永と船方の目つきがちがい立脚していた。以下略この秋山清の好意的な批判で、その頃に岡本潤が取り上げてくれた意味と、当時のアナとボルが対立していた文学理論の一端がのぞけた訳だが、ともあれその時の岡本潤の批評で力づけられたことはたしかである。大元と

田木の論争と競作につづいて「詩精神」の一〇年一月号に田木が作品「帯鋸」を書いていゝ。それに対して武田亞公が作品「雪の降る日」で同じ生産場面を描いて（かなり長いものであつたと思つている）発表し、それと一緒に田木の嘘を指摘した。それに対して田木は「××君に」の題で答えている。この文章は「機械詩集」の末尾にのせてあるが、これは田木の機械に（生産面）に対する想点を明確に説明している。田木はその中で書いている。（そして今日は何時になれば、労働の作品における感覚のリアリティーが精神のリアリティーに高まるかちよつと見通しのつかぬ場合、全然反対の側からの私などの努力を全部的に抹殺することは、決して労働者諸君にとって賢明なやり方でないということ、二つの努力を正しく交錯させる所以でないということ、を、認めて頂きたいと思う。）。田木と武田の作品を引用したいのだが、武田亞公（彼は当時、横浜・鶴見の製材工場で働いていた）の作品が手元にないと長くなるので止めしておくが、その問題に対して私が当時どんな考えをもつていたか、その頃書いた（「詩精神」十年・七月号の六号評論に「五月号にふれて」と題した）一文から引いておく。

船方一氏の「一日の仕事をおへて」はプロ詩の一つの発展を示すものとして注目す可きである。「闇」を嘆く歌の後に来るものこそ私の最も注目しているものであつたのだ。然し「ふるさとへの歌」「河べり」等で示したリアリズムもここでは洪水のようにあふれ過ぎて肝心のふてぶてしさが弱められてゐる。労働の苦痛を、そこから起る様々の感情の原因をあげこうとすることは決してこのように何もかもならべることではない。生産面に立つ優位性も、形象化する技術の劣る時はマイナスとなることに注意しよう。然し三月号の「ふるさとへの歌」は内容と形式共にりつぱなものであつた。詩をあまり読まぬ仲間が感心していた。私はあの中で次の行で歌い得る詩を思わせられた。

吸う息上げ潮六時間
吐く息下げ潮六時間
二十四時間二呼吸

ついでに「ふるさとへの歌」で森谷氏が内容の古さを指摘して「文学評論」五月臨時増刊号の「河」を（この作品は数等上だ。充分我々を感動させるだろう）といつていて、私が私には前者を読んでから後者を読んで、

氏とは反対のことがいえる。「またか」と思う常識が出てくるからだ。力の入れ方も前者とはだんちだ。この感じ方、見方にインテリと労働者の差があるのではないだろうか。（このことは他日述べたいと思う）プロ詩の発展段階は勿論此処に止るべきではなく、生産面に這入つての（船方氏の詩は二つ共失業している）新しい環境の裡に見出さるべきであつて、そこに詩人として、同時に労働者としての役割が与えられる。

（彼は五月号でそれを示している）田木氏の「警笛」は「ゴーストアップ」以下だ。氏の作品で何時も感じるのは、インテリの強烈な意欲を生産面に託して歌う高い詩的精神（というか）であつた。然しそれが具体的なものとして握ませないのは（氏が捨捨として書くにもかかわらず）歌う職場内の人達の感情を全然無視して（生産過程の無視、ウソのリアリズムは当然だ）ひたすら己の意欲を其処に託そうとすることに急であつたが為ではなかつたか？ 私は氏がそこを通過して我々の生産面と感情を真実に歌つてくれる日を鶴首していただけに「警笛」での失望は大きかつた。——（他人の言うことなど一向耳傾けないこれらの人々。——

一郎、町田登等である。山田今次が何故に参加しなかったのか、不思議に思っていたが先日（九月十一日壺井繁治氏の告別式で）当人からきいてわかった。第一巻九号―九年十月号に一度だけ投稿していた。「荷役」の戸部重吉が彼である。彼は当時、主として「プロット」の仕事をしていそうである。反戦詩集「赤い銃火」に（召集電報）を書いた野毛九郎はこの頃は木下勇の本名で雑誌「麴」に参加して小説を書き始めていた。

秋山 清

アナキズム
文学史

B6版 箱入 358頁
千九百円

筑摩書房

身の利害以外まるで念頭にないこれらの人々。まるでエゴイズムと言うものの表情のようなこれらの血走った顔々への一途な復讐の念に私は駆られている。片手をかけ片足をかけ車体にもぶら下った執着というものの実体をふりおとすことばかりを私は考えている。――この辺が「警笛」のねらい処らしいが、ピンとこない（田木氏よ、この抽象的批判をゆるせ）その轢殺する時の清新な感触？ を追いもとめるように走り続ける最後のウソのリアリズムが特に目立って例の強烈な意欲が負かされている。今迄のものでは意欲が勝っていた。ここでは「常識的見解」では片づけられないものがありはしないか。大元氏の作品が事実の正確な描写にもかかわらず、意欲の低調のために人を打つ力の欠けているのと、田木氏の「ゴーストアップ」迄の作品と比べてみる時、この両者の完全な統一こそ、プロ詩の進む一つの路であることがうなずけるのである。（私は「船底修理」で試みて失敗した）。我々が生産面を描く時に犯し易い、溺れ易い「事実の正確」について島田宗治氏が忠告しているのは当を得ている。――

以上のような、わかたつたような、わからないような文章を書いている。この感想は私が「詩精神」二十一冊でたった一回だけ書いた文章である。現実と詩的現実、この問題を大切なものと思いが、つまり労働者詩人の「本命」と思いつながら其後も私はかなりの間「不安の文学」にいきよされたものを書いている。これを書いていて気がついたのだが田木繁の「警笛」という作品は「機械詩集」にも「田木繁詩集」にもものつていない。「××君」の末尾に一九三四・二・一とある（上記二冊の詩集共）のは一九三五の間違いである。――××君に――前号（「詩精神」三四二年二月号）××君の拙作「帯鋸」に加えられた批評は、――とあるが「詩精神」は一九三四年・二月号が創刊であつて、この号には田木も、武田も書いていない。三五年の一月号に「帯鋸」は発表されている。それを読んで武田が二月号に反論したのだと思うが、その二月号はいま手元にはないのではっきりいえないが、田木が「前号（「詩精神」二月号）××君の拙作「帯鋸」に加えられた批評云々と書いているのだからほぼ間違いないと思う。「詩精神」に横浜から参加したメンバーは、杉方一、島田宗治、武田亞公、松永浩介、杉沢

編集後記

◆清水清、河合俊郎、木原実と、同人の詩集が続けて出版されたので、この号は、その批評を軸に編集した。清水と木原の詩集は戦争詩集なので、戦争体験をもたない黒川洋、暮尾淳と、戦中世代の西杉夫、村松武司を書き手に選んだ。両者の戦争に対する受け止め方の違いを見ようとする意図であつた。河合詩集については、はじめに予定した北本哲三が書けず、短期間に吉田欣一にピンチヒッターをやつてもらふということがあつて、吉田には忙しい思いをさせた。もう今年中とはいくまいが、続いて野口清子の詩集も出る予定だし、伊藤正吉の詩集も計画されている。

◆「ボルシェヴィキとの対立と論争を旨とすることによつて出版した趣きがある」（秋山清・アナキズム文学史）アナキストの雑誌「文芸解放」の同人であつた金井新作の第三詩集「生死の詩」が十一月に出た。現代詩とは云い難い、いわば近代詩の集積で、例えば恋の詩ひとつをとつてみても、その恋は大正の恋の趣きだが、ここには心を揺り動かすものがある。金井新作に比べてコスモスの詩人たち

は技術的にも勿論ずつと進んでいる。しかしコスモスが失つた感動が金井にはある。こういう詩について、或いは我々の詩について考え直してみる必要があるのではないか。（B6、81頁、千二百円。沼津市山神道四一―瀧詩社刊）

◆コスモス創刊のスタッフであつた金子光晴が六月三十日に死んだ。七十九才。病名気管支ゼンソク。ほんの少し前、舞台でうたう姿を週刊誌のグラビアで見たばかりだったが、50号記念号のコスモスは発送されなまま宛名を書いた封筒が残つた。金子は創刊号から第二次の終わる十九号までのあいだに十五篇の詩をコスモスに載せている。この頃は「そりや、品物があつて困つていたくらいだから」と二十周年記念の座談会（第三十一次一）で語っているが、作品ばかりでなく、雑記などの文章をたくさん書いていて、何も載っていないのは十四号一冊だけである。追悼の意味をこめて、いまのコスモス同八のうち、もつともかわりの深い暮尾淳が、金子の戦時中の作品について小論を書いた。彼の敬慕の深さを示す力作だと思ふ。暮尾は休刊中の詩誌「あいなめ」を、金子光晴追悼号をつくつて終刊とするということである。

◆九月四日に壺井繁治が死んだ。七十七才で、病氣は新聞の死亡記事によると、マクログロブリン血症という、聞きなれない難しいものであつた。壺井もコスモスの第一次の同人であり、二篇の詩のほか雑記など書いているが、いまのコスモスには、彼について追悼の思い出を語るほどにかかわりのある人はいないので、秋山清に書いてもらった。

◆ことは、形の上では三冊出たが、十号は前年発行が遅れて一月に出たので、実質二冊でしかない。こんなことではコスモスが運動体などとはいえない。（清水 清）

コスモス 第12号（通巻51号）
定価三五〇円 千五百円

発行 一九七五年二月一〇日
編集人 清水 清

発行所 東京都文京区白山五―三六―八
コスモス社

電話 03 八二二―二四五四
印刷（資）オカダ印刷
名古屋昭和区長戸町四―一〇